

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

明日もまた生きていこう 一十八歳でがん宣告を受けた私ー  
横山友美佳著 マガジンハウス 2008年5月初版



はじめに

昨年11月18日、当会の高野亨理事よりメールがあった。「小腸原発の平滑筋肉腫の患者さんから、このまま肝転移に対しラジオ波治療を続けるべきか、井上先生に相談したいというメールがあった。会っていただけるか。」早速Mさんにメール。11月24日の振替休日に会うことになった。Mさんは昭和36年8月27日生まれ、私は昭和36年9月27日生まれ。Mさんは宇品に住んでおられ、私の実家は翠町で近い。Mさんは今は肉腫治療の第一人者である大阪府立成人病センターの高橋克仁先生のところに加療を受けられているが、最初に手術を受けられたのは県病院(県立広島病院)。私も県病院で治療した。このようなやりとりをしながら、「会う前からお互い勝手に親近感を感じていますね」等メールした。

24日彼女が私の診療所を訪れてくれた。ジーンズが良く似合う、髪綺麗な長身の女性であった。聞かなければ、がん患者とはわからない。私は、「ラジオ波治療を受けながら、ヴォトリエントという新薬を内服しながら、加療を続けられてはいかがですか。待っていたらきっとさらに良い薬が出ますよ。」と答えた。彼女は、「ヴォトリエントを個人輸入していた人もいました。実は私、主治医から「あなたの肝転移には普通の医師ならば治療をしませんよ」と言われています。それに前回の検査で肺への転移も見つかりました。先生から、ラジオ波を勧められたのですが肺だけは傷付けたくないのです。」そして眼を輝かせながら次のように言ってくれた。「井上さん。私の周りの患者さんも次々と亡くなっていくのです。肉腫が克服できるとは、驚きました。井上さん、是非先生のことを患者さんに伝えて下さい。肉腫患者の希望に繋がりますから。」そして、握手をして別れた。

こちらの方が励まされた。彼女はこのことを伝えたくて会いに来てくれたのだ。私は何も出来なかった。虚しさしか残らなかった。彼女に対してどのように対応したら良かったのか、今後私にできることは、経過も気になりつつ過ごしていた。

1月22日の夕方、私の携帯電話が鳴った。Mさんのお兄様からであった。「Mは、16日金曜日、午前2時7分亡くなりました。年末はお世話になり、有難うございました。」

今回は、Mさんのことを偲びながら、本書を紹介する。

著者の病歴等

1987年3月2日、中国北京で2人姉妹の長女として生まれる。小学3年より、バレーボールを始める。1997年、一家で来日(甲府市)。98年日本国籍取得。中学時代からオリンピック有望選手に選ばれるなど国内外で活躍。木村紗織選手と共に、名門、下北沢成徳高校へ進学。1年時に春の高校バレーで準優勝。2004年

2年生で、全日本シニア選手としてワールドグランプリに出場。2008年の北京オリンピックを負う背負う選手として期待されていた。

2年生の3学期の期末テストが終わった2005年3月8日、体調が普段とは違うので、近医受診。レントゲン写真を撮ったところ、肺に約5センチの影が写っていた。18歳の誕生日を迎えて数日後のことである。虎の門病院で、がんと診断された。国立がんセンター中央病院へ転院。針生検の結果、「横紋筋肉腫」と診断された。肉腫は、胸壁から肋骨の間にあり、骨髄への転移も見つかり、ステージ4。小児科病棟で加療することになった。

2005年4月13日より、抗がん剤療法(エンドキサン+コスメゲン+オンコビン)が始まった。1クール3週間で、14クルールの予定。入院生活は約1年続いたため、院内学級「いるか分教室」へ転校。難関ではあるが、早稲田大学教育学部を受験すると決意する。5クールが終わった段階で腫瘍が小さくなっていたため、7月28日手術。腫瘍は全摘できた。ただし、摘出した腫瘍からがん細胞が見つかったため、抗がん剤を、イホマイド+ベプシド+オンコビンへ変更。9クール終了後、放射線療法を施行。完治するために念には念を入れたフルコースの治療なので、どんなに強いがん細胞でも絶対に死ぬ、完治以外は考えられなかった。11月27日早稲田の入試、12月2日発表、「合格」であった。予定通り14クール行い、2006年2月21日、退院となった。検査でわかる範囲では、がんは体から消えていた。

4月1日入学式、大学生活が始まった。2006年6月6日、退院して4か月後、初めての定期CT検査。転移が見つかった。主治医から3つの選択肢が提示された。1つ目は、もう一度これまでとは違う抗がん剤治療を行って完治を目指す。2番目は弱い治療法に変えて今の状態を保ちながら病気と共存する。3番目は特に治療をせず、残された時間を楽しく送る、その場合余命は約半年と思われる。但し、最初の2つは行ってみないとそうなるかどうかわからない。

彼女は、1番目を選んだ。シスプラチン+アドリアマイシン。7年以内ならいつでも復学できるのだが、そのような日は来ないと感じるようになり、4クール終了後、9月21日退学届を提出。そして、予定通り5クール行い11月15日退院。2007年2月22日、再々発。今度は、2番目を選ばざるを得なかった。イリノテカンを用いて加療。20歳の誕生日は病院で迎えた。イリノテカンの副作用は予想より強かったが、効果はなく、前回用いた薬を半量投与することになった。脊髄にも転移し疼痛が強くなったため、7月放射線療法を受ける。

11月29日横浜のスタジオにて、振袖で成人式の写真を撮る。2008年4月1日脱稿。同年4月17日永眠。本書を手にすることはなかった。

## 本書の内容・感想

私も経験したが、抗がん剤治療の辛さは、これは体験した者にしか理解できない。吐き気、便秘下痢、倦怠感。場合によれば、頭痛、発熱、手足のしびれ。さらに、彼女の場合は女性であり、脱毛の精神的な苦しみ。帽子、かつらを手放すことはできなかった。

最初の抗がん剤治療が終わって、次のように述べている。

『この地獄のような14回の治療をクリアできるなんて最初は思ってもいなかった。ただ、いつも治療の前になると、もう少し生きたい、まだ死にたくないと思う気持ちとともに、これで最後の治療にするから、今回だけは耐えよう、と心の中で決めていた。だが、体調が回復して、また少しの間楽しい生活を送ると、生きていてよかったと必ず思う。それならもう1回だけ、もう1回だけ治療をしよう、そのくり返しで今日まで来た。

治療との向き合い方、闘い方には人それぞれの考え方があると思うが、横山友美佳方式は目の前にある1

クールだけを見て、そこに全力を尽くし、最高に楽しい生活を送ることだけを考える。毎日の生きたい、今日も生きていてよかったと思える気持ちが、「明日の希望」へとつながった。』本書のタイトル「明日もまた生きていこう」。良い言葉だ。

成人式の記念写真を撮られた時の心境は。抜粋する。

『結局は私が望むような効果は出なかった。がん細胞は大きくなっていった。この結果に失望した気持ちはもちろんあったが、もう以前のように悲しんだり泣いたりはしない。何があっても、どんな結果が出ても、冷静にありのままを受け入れられるようになった。あんなに負けず嫌いだっただが今では何も求めず、ただありのままの現実を受け止めるだけになった。

心がすでに麻痺をしているのかもしれない。そうさせているのかもしれない。現実の不公平、残酷さに怒りを感じ、騒いだり、争ったり、泣いたりもした。しかし、そんなことをしても何も変わらないとわかった。それならば、運命に従い、何も考えないように努力した。不快なことを忘れて、自分で心や頭を麻痺させた。

楽になりたかった。辛いことが多過ぎて、解放されたかった。ある意味、麻痺もひとつの救いなのかもしれない。時間が長く経つにつれて健康な人と比べることを忘れて、まるで自分の生活が普通であるように思わせてくれる。過去の自分と比べるのも忘れて、今の自分しか存在したことがないと思わせてくれる。これでいいと思った。

ただただ、麻痺が解ける瞬間、すべてを思い出し、考え出したときは無数の針が一気に胸を刺す。』

Mさんも私の所に来られた時は、そのような心境だったのであろうか。

弱冠 21 歳でこのような本を残してくれた著者に感謝の意を表すとともに、M 様、横山友美佳様のご冥福を心よりお祈りする。合掌。

理事 井上 林太郎